

公民として必要な能力を育成し、社会的関心を高める授業

ーディベートを中心に生徒が自分の言葉で語ることを目指す試みー

千葉県立 ○○○○ 高等学校 ○○ ○○ (現代社会)

1 はじめに

私は平成元年に中堅進学校で期限付き講師を2年経験した後、3つの高校で教壇に立ってきた。それらの学校は、いずれも家庭や本人、あるいは何らかの理由で学習意欲が乏しかったり、中学校までの学習が不十分な生徒の多い高校であった。どの高校においても、生徒が板書をノートに写して丸暗記してテストで点を取るだけで社会科の学習となってしまうことに、授業者として責任を感じ、授業改善への模索を重ねてきた。このような授業になることを単に生徒側の問題だけにせず、今、目の前にいる生徒達に対し、将来にわたって有益な授業をしなければならないと考えているからである。

新学習指導要領総則の一般方針には、「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」「主体的に学習に取り組む態度を養い」「生徒の言語活動を充実する(中略)よう配慮しなければならない」とある。さらに第3節、現代社会にも「現代社会と人間についての理解を深めさせ、現代社会の基本的な問題について主体的に考察し公正に判断するとともに自ら人間としての在り方生き方について考察する力の基礎を養い、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる」ことが目標となっている。つまり、主体的に考え、判断し、表現する力の育成が求められている。

本来、現代社会の授業は上記のような能力を向上させるための学習活動であるよう努めなければならないし、社会的関心をもった公民として社会へ送り出せるよう努めなければならない。本研究では「そのためには授業で何をどうするか」を出発点としたい。

2 主題設定の理由

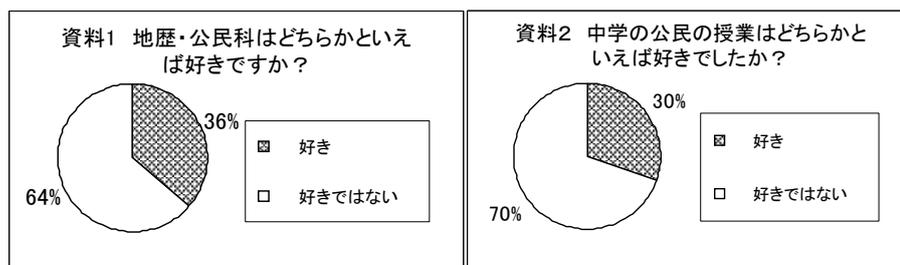
(1) 現状認識

これまでの教員生活で卒業していく生徒達を見送る中で、私は「果たして彼らは上司と、家族と、恋人友人と、あるいは世の中のシステムと、意見が合わない時にどうしていくのだろうか。たぶん、考えることや交渉することをせずにキレたり、逃げたりして納得できないまま不満を溜めていくのではないか」という不安をもってきた。生徒は卒業後どこかで仕事に就き、親となり、有権者となり、社会を構成する一員となる。しかし、そこに必要な知識や社会人としての自覚や問題意識は授業で定着せず、現実生活とは遊離した「考査のために丸暗記したもの」として公民の授業を通過するだけになりがちである。

会社組織をはじめ社会が個人に求める能力は、以前は与えられたことを黙々とやれる力が重視されていたが、今日では、情報過多の中で正しい情報を選択する力、自分の意見を主張し、他者の意見を聞き、妥協点を見つける力が求められるようになってきた。大学入試も入社試験もプレゼンテーションやグループディスカッションを選考に用いるようになり、必ずしも単なる知識量だけでは評価されなくなっている。

4月当初、生徒に次のような調査を試みた。**資料1・資料2**のとおり地歴・公民科、中学校の公民の授業は好きではないという生徒が過半数を占めている。好きでない理由は、必要のないこと

まで覚えないういけ
ない・眠くなる・覚
えるのが大変等であ
る。一方で好きな理
由は、2年時の世界
史が楽しかったか



ら・中学校の公民の先生が楽しかったから・テレビなどで気になることがわかるようになったからといった理由が挙げられていた。授業者がいかに有益な授業を実践できるかで生徒の評価も高くなると予想する。

(2) 講義形式の問題点

多くの教員がそうであるように、私も講義形式の利点を単純に否定するものではない。多くの教員が講義形式であっても一方通行にならないよう様々な工夫をし、授業を組み立てるだけでも大変な労力をかけている。私もできるだけ授業を「発問」と「答え」の掛け合いを軸に展開してきた。いわゆる「ノリのいいクラス」では、かなりの生徒が教員の話の筋道（論理）に従って授業に主体的に取り組んでいる。この蓄積も重要である。だから、視聴覚教材や実物などの資料を駆使して授業への参加意欲を高める工夫もしてきた。それでも、自分が指名された時になって初めて発問があることを意識し、単語でしか、あるいは「わかりません」しか言わないで、ノートを写して満足する者もいる。

講義形式の授業の欠点としては①受身で聴いただけの学習内容は考査が終わればたちどころに忘れてしまう。②語句の羅列でしかテーマをとらえていないため、知識が構造化されず、さらに関連・発展させた新しい知識を受け入れにくい。③生徒自身が疑問に思っ調べてみて納得して人前で説明できるようにしようとする活動が学習の最も楽しいところであるのに、教員が調べた結果を与えられるだけでは思考力や判断力も鍛えられない。④現実社会での問題として認識されず、机上のことだけで通過していくことになり、社会の出来事に無関心な生徒を変えることができない。等があげられる。

日本社会だけでも様々な課題が山積している。例えば財政赤字、震災復興、原発、派遣切り、中国との関係、米軍基地、死刑制度、児童虐待、そして何よりも投票率の低さに表される政治的無関心層の増加。これらの諸問題に対して、生徒自身が幸福、正義、公正の視点から考察する態度を育成することで、より良き公民を社会に送り出すことの一助となる。現代社会の授業はこのような使命を担っているのだと私は考える。

(3) どうやって育成するか

平成元年に教壇に立って以来、ディベートを授業に取り入れてきた。その年の社会部会でディベートをテーマにした授業実践報告を聞き、その実践に感銘を受け、配布された資料を授業で活用したことがきっかけである。また、普段の授業で取り扱うテーマが、必ずといっていいほど「理のある対立した主張」があること、それによって社会には簡単に解決できないでいる問題があること、その問題をどう解決するかと考えるか、が学習の軸になっており、どのような方法でそれを生徒に理解させるか、自分ならどう考えるかを引き出すかが授業者側の課題であった。

ディベートは対立を明確にした勝敗のあるゲームである。自分の考えたことを自分から手を挙げて発言しなくてはならない討論会とは異なり、ディベートは自分の意思とは関係なくその立場から主張できることを、定められた順番で言わなければならない。それは逆にゲームに勝たなく

てはいけないという理由で人の前で発言することへの抵抗を減らすことになる。チームで協力して、適切な資料を探さなくてはならないし、自分達の意見を整理して聴衆に理解できるよう発言し、敵の主張にも耳を傾け、的確に反論しなくてはならない。このような学習活動を通じて、テーマへの固定した思い込みを超えてより深い理解を獲得させることが可能となる。さらには講義形式では暗記事項の羅列で終わったテーマがリアルな問題として生徒を刺激し、社会的関心を高めるきっかけとなる。

ディベートはこれまでも多くの先生が実践してきており、指導課による「高等学校指導資料 確かな学力を育てる学習指導と評価の在り方」(平成19年3月)に詳しい実践報告が掲載されている。

それでも、ディベートは多くの先生方にとって敷居が高い教材だというイメージが強い。それは、ディベートはルールを教員側が理解し、生徒に理解させることから始まり、準備に手間をかけなくてはいけなかったり、失敗の不安がつきまとうからだ。特に学習意欲に課題のある生徒を対象にすると、教室で自分が発言することは恥をかくだけだという抵抗感が強いし、矛盾するようだが失敗しないようにするための準備に時間や労力をかけようとはしない。資料を見つけることを省くために関連する新聞記事などの資料を教員が配布しても、自分から活字を読むことをしない。あるいは読みこなせない。教員は、事実誤認の発言をする生徒が出れば訂正しなくてはならず、全く話せない状態になったらどう対応するか、聴衆がそれに飽きて遊びだしたらどうするか等の不安を考えるとつい二の足を踏む。

しかし、私の経験ではやらなければ良かったというようなディベートはなかった。出来栄は様々だが、一方通行の授業を繰り返すよりも結果的には有益であった。

ディベート授業では、生徒が自分の言葉で語り、現実社会の問題としてテーマを意識することになる。その後の講義形式の授業でも、自分にもかかわりのあることとして考えながら聞く態度を育成することになる。ディベートは、生徒が主体的に考え、自ら調べて活用できる資料を選び、相手側にも理があることを知って迷い、物事を別の視点から見ることに基づく経験をさせることができる。その経験が契機となって、扱ったテーマに関わる知識・情報の正しさへの意識も育成されたり、あるいはその後の別のテーマの授業にも関心をもって臨むようになる。

本研究では、①学習意欲に課題がある生徒にもディベートができるよう、かつ、生徒ができるだけ力を伸ばすことになるやり方を工夫して段階的に実施まで導く方法を探る。②ディベートを通じて論理的思考力・傾聴力が鍛えられ、事象へのより深い理解が可能となり、社会的関心が高められたかを検証する。

資料3

3 ディベート授業の指導計画

(1) 論題(テーマ)の選定

テーマの選定には授業者は細心の注意を払う。特に、必ず肯定否定どちらにも理のある政策論題に限定しなくてはならない。どちらか一方だけが正しいということを生徒に教え込むことが目的ではないからである。

勤務校	時期	テーマ
船橋西高校	平成元～2年	レジ袋使用は環境に悪い
		割り箸使用は環境に悪い
		原発は推進すべき
下総農業高校	平成3～9年	脳死患者からの臓器摘出はすべきでない
		尊厳死を容認すべき
布佐高校	平成10～19年	フリーターという生き方は正しい
		少年法を厳罰化すべき
		自衛隊は合憲である
		アメリカは銃の規制をもっとすべきである
佐倉南高校	平成20年～	死刑制度に賛成する
		ホームレスの自立支援をもっとすべきである
		裁判員制度に賛成する
		選挙の棄権に罰則を設けるべきである
		消費税を値上げすべきである

また、多くの生徒は最初は人前で話すことに抵抗があるので、本来は話しやすいテーマにすべきであるが、「夏と冬、どっちが好きか」といったテーマから入ることはしていない。私が取り組んでいるのは、あくまでも公民としての問題意識を高めるためのディベートであって、その時々々に報道され、世論が割れたニュースにかかわる政策論題をテーマにしている。これまでに扱った代表的なテーマを資料3に掲載した。原則、現状に対して変革を提案する側を YES 派とするが、生徒が混乱しないよう、現状維持が YES 派となるテーマもある。

(2) ディベート授業の進め方

ア 1 学期の授業計画

取り扱う授業単元と実施するディベートテーマは関連させており、講義形式で学んだ知識・考え方を活用し、問題意識を高め、理解を深めることを狙っている。

3つのテーマのうち1つは実施した単元と次の単元の両方に関連するテーマを設定し、学習内容が相互に関連していくようにした。例えば「基本的人権の尊重」の単元で参政権を取り扱ってから、第1回ディベートで「選挙の棄権」を実施する。さらに次の単元では国会のあり方や課題として低投票率の問題が扱われる。第2回ディベートのテーマ「消費税値上げ」も行政の役割を扱った後で、2学期の経済分野において、日本の財政問題・公共事業の役割・年金問題へと発展する。

資料4のとおり、ディベートは1学期に2回実施した。1回目は教員からテーマ毎に賛成側の資料、反対側の資料等の配布をして、発表原稿や反論原稿を書かせ、まずディベートへの抵抗感をなくし、意欲を高める。2回目はハードルを高くして教員からの資料の提供はしないで、自分で調べ、必要な資料を選んでくることも自分でやった上でのディベート実施とする。

イ ディベート授業計画の概要

テーマの提示、班編成、ルール説明	…	1 時間
レポート作成	…	1 時間
レポート返却、班別作戦会議	…	1 時間
ディベート実施	…	各テーマ 1 時間 × 3 テーマ
審査用紙返却、アフターディベート	…	1 時間

ウ 授業計画の詳細と留意点

ステップ1 予告と仕込み

講義形式の授業を実施しながら、いずれこれらのテーマでディベートを実施し、評価の対象にすることを予告する。自分はそのテーマならどういう意見を持つのか考えながら授業を受けるように指導する。

ステップ2 テーマの提示と班編成、ルール説明

- ① 3つのテーマを提示し、YES 派と NO 派で6班を編成させる。本校の生徒は誰とでも拘りなく班活動が出来るため、多くの場合、座席位置で機械的に6～7人の班をつくっている。
- ② どのテーマの YES 派か NO 派かを班で選ばせる。

資料4 (年間指導計画の一部である)

学習指導計画	
4月	1 基本的人権の尊重
	①人権獲得の歴史 絶対王政から民主政治へ
	②人権獲得の戦いVTR「キング牧師」視聴とレポート
	③日本国憲法における基本的人権の概要
5月	④自由権における今日の課題 死刑制度
	⑤社会権における今日の課題 ホームレス自立支援
	⑥人権尊重と公共の福祉
	⑦第1回ディベート準備と実施
	テーマ1 死刑制度に賛成する
	テーマ2 ホームレス自立支援をもっとすべきである
	テーマ3 選挙の棄権には罰則を設けるべきである
6月	2 国民主権
	①主権とは何か
	②国会の役割と組織
	③内閣の役割と組織 各省庁の役割
	④裁判所の役割と組織
	⑤裁判員制度の意義 VTR「裁判員制度」視聴とレポート
7月	⑥第2回ディベート準備と実施
	テーマ1 裁判員制度に賛成する
	テーマ2 原子力発電を廃止すべきである
	テーマ3 消費税を10%に値上げすべきである

この時、不本意にも自分の本当の考えと逆の担当になったとしても「演じてなりきること」がディベートには大切だという点を強調する。

どれを担当するかは生徒達のやる気を左右する上、この時のドラフト会議で班員が相談しあう雰囲気をつかむので、交通整理して不公平にならないように配慮している。

③ルール説明

ディベート実践では千葉高校の藤井剛教諭の先行研究報告のように、ディベート甲子園でも採用されているルールを採用し、詳細なルールブックを作成配布して実施するのが理想である。しかし、これまで私が実施してきたディベートは、制限時間なし、登壇回数も議論が平行線になるまで続ける、という形で実施してきた。ルールが細かくなると、ディベートへのやる気を削ぐと判断したからである。そのようなディベートでも、生徒から拍手と歓声が沸き、審査員の中から「俺にもちよっと言わせてくれ」という助っ人希望者が出たり、アトラクションとして同僚の教員に頼んで特別参加してもらい、賛成と反対で意見を戦わせて見せると、生徒も良い刺激になったようであった。時には1人で15分以上の立派な演説をする者もいれば、気合十分で登壇したけれど思ったように主張ができずに長い時間かけて空振りに終わる者もいた。一方、多くの班は時間制限がないために作戦タイムでどう反論するかを相談するのに時間がかかり、聴衆は待たされるが多かった。

本研究では、このような問題点を改良した。昨年度までのディベート実践で、佐倉南高校の生徒はある程度の能力を持っていると判断し、今回は時間制限・登壇回数制限を設けて、限られた時間の中で何を発言すべきか、予想される反論は何かを考え、準備しておくことを生徒に課すことにした。

資料5のルール説明書を配布してやり方を事前に伝え、ディベートの概要をつかむように指導した。

資料5

ディベートの進め方(教科書に掲載されている方法)

- ①YES派立論(3分)
- ②NO派からの質疑とYES派からの応答(2分)
- ③NO派立論(3分)
- ④YES派からの質疑とNO派からの応答(2分)
- ⑤NO派第一反駁(2分)
- ⑥YES派第一反駁(2分)
- ⑦NO派第二反駁(2分)
- ⑧YES派第二反駁(2分)
- ⑨NO派最終弁論(2分)
- ⑩YES派最終弁論(2分)

審査結果の集計・発表

※間にそれぞれ2分間の作戦タイムを認める。
ただし、2分経過しても登壇しない場合は反則とみなす。
※各班で立論・質疑・反駁2回、最終弁論の各担当者が登壇して演説する。
登壇して演説をした者はその内容に応じて評価する。
※敵側の演説を書きとめて、次の反論に活かす参謀役も必要となる。

ステップ3 レポート作成

自分の担当するテーマと立場で主張できることを書くように指導する。これが発表原稿の元になるので、根拠を付けてたくさんの主張理由を書くよう指導する。論点1、論点2…と列挙すること、それぞれの論点に短いまとめの言葉(タイトル)をつけて、詳しい主張理由を書き、さらにできるならば予想される反論も書いておくことを指導する。書いていくうちに調べる必要を感じたことはメモをとっておいてあとで調べることも指導するが、大抵の生徒は調べてこないまま本番を迎える。

この時、班員の中で1人だけ、敵側の立場から主張できることを書く者を班で相談して決めさせる。「敵側の主張が想定できていないと、戦う準備ができない」という理由を生徒に伝える。その際、「敵味方の主張がごちゃ混ぜにならずにきちんと考えられる人、班員みんなが頼りにしている人を担当にした方が良い」という助言を付け加える。

ディベート1回目の場合には教員側で用意した資料から原稿を書かせることで、調べる時間を短縮する。本来は教員の選んだ資料だけでは不足だが、コンピューター室に移動させて調べる時間を設けても、調べないで怠ける者の指導に追われることになったのでやっていない。原稿提出後、ディベート実施までに調べてくる必要を感じて自主的に調べてくる者がいるので、敢えて調

べる時間をとらないことにしている。2回目以後は生徒もディベートで勝つためには資料調べをしないとだめだと身をもって知るので、資料配布はせずに、自分達で準備させる。

ステップ4 レポートの補強

回収したレポートは教員が朱を入れて補強する。その生徒の論点の整理と班内での論点の整理の両方が必要。さらに不足している論点があることの指摘や、敵側を利するだけの論点は解説を入れアドバイスする。ディベートへの不安を軽減し、やる気にさせるために、評価はできるだけ励ましと助言を心がける。

ステップ5 レポートの返却および作戦会議

①班をつくり、返却したレポートを班内で相互に読み合う。活用できるところをお互いにチェックしておく。この時、多くの生徒のレポートは、自分たちの意見を守る内容も、敵側の意見を攻める内容も混ざっているため、これを整理するために以下の作業をさせる。

②A3用紙を班で1枚配布し、左側三分の一に「立論」を書く。

③用紙の中央三分の一に「立論への予想される反論」を書く。

④用紙の右側三分の一に「予想される反論への再反論」を書く。



作戦会議の様子

この作戦用紙と各自のレポートをもとにしてディベートを実施する旨を伝える。

以下の資料は、平成22年度3年生による裁判員制度に賛成する立場の班の作戦用紙である。

素人がやることにより、悪質なものはちゃんと罰せられる。
(多量に人殺しとかかなり刑が重くなる) 状況上も結果はかわりませんから

法律の素人である裁判員の見解を聞くことで様々な目録から事件を見ることができ、弁護士だけでは法律を重要視してしまうので人間的な心算で事件に向き合えない。

仕事の単位が... 裁判員になった人が守られる法律がしっかりあるので大丈夫です!

裁判員が逆恨みされて襲われる危険性がある。

仕事を休んで参加しないといけませんか?

公務員以外は休めない場合が多い

素人なので間違えた判決を下す可能性があるが凶器や死体など見なくてはいけません。

裁きに分けられる被告人が特定の宗教団体に所属するようなら人を殺した場合、裁判員の中にその特定の宗教団体に所属する人間がいた場合には当然かばうと思いますが、裁判員になった人の人権を侵害することになりますか? (罰金、守秘義務違反、被告人の運命を決める重責を背負う。)

「素人裁判員」が行われると安心して暮らせる社会が「前向き」してまいりますか?

再審案件は陪審員制度のほうではないですか? 日本は裁判員制度です。裁判官が3人入りする陪審員制度のようにはならないと思います。

大人数

裁判員になった人が守られる法律がしっかりあるので大丈夫です!

人の命が関わる問題に対し、仕事を優先するという考えが責任感の無さの表れだと感じます。仕事に気を配っているようでは日本は手抜きです。どうしてもタダならば罰金を払って下さい。ですが会社側が参加を止めた場合は会社側に責任が問われるので本人に直接処罰されませんので安心です。

アメリカの陪審員制度と違い日本は裁判員制度で裁判官が3人入る為間違えた判決になることはないです。

凶器や死体など見ることによって事件の残酷さなどを見ることが感じることができると、正しい判決へつながることができるとは思います。

以上のことから、私たちは裁判員裁判に賛成です。

市民の司法への関心が高まる
裁判時間と費用の短縮
国民が司法を直接見る機会が増え、司法の不信感がなくなる。
多くの国民に見られることから裁判官の真実さが分かる。
裁判の有用性や判断に一般人の感性が取り入れられ、民主主義としての正しい判断が生まれやすくなる。

⑤当日の役割分担と発表順序の確認

各班に右の役割分担表（網がけ部分が自分達の担当）を配布し、担当者を決めるよう指示する。この表は当日の流れと自分が何をどの程度やるのかを想像させることにもなり、準備への動機づけとなる。さらに、審査用紙見本を配布して、流れの確認と合わせて審査用紙の書き方を確認しておく。

各班を回りながら補足やアドバイスをし、その中で調べておくべき事柄やどう反論するか考えておくべきことなどの指摘をする。ここでのアドバイスで生徒を上手く乗せられると、ディベートは成功する。

テーマ									
YES派用役割分担									
①YES派立論 3分	②N質問 2分	③Y応答 2分	④N第一反駁 2分	⑤Y第一反駁 2分	⑥N第二反駁 2分	⑦Y第二反駁 2分	⑧N最終弁論 2分	⑨Y最終弁論 2分	⑩N最終弁論 2分
③NO派立論 3分	④Y質問 2分	⑤N応答 2分	⑥Y第一反駁 2分	⑦N第一反駁 2分	⑧Y第二反駁 2分	⑨N第二反駁 2分	⑩Y最終弁論 2分	⑪N最終弁論 2分	⑫Y最終弁論 2分

テーマ									
NO派用役割分担									
①YES派立論 3分	②N質問 2分	③Y応答 2分	④N第一反駁 2分	⑤Y第一反駁 2分	⑥N第二反駁 2分	⑦Y第二反駁 2分	⑧N最終弁論 2分	⑨Y最終弁論 2分	⑩N最終弁論 2分
③NO派立論 3分	④Y質問 2分	⑤N応答 2分	⑥Y第一反駁 2分	⑦N第一反駁 2分	⑧Y第二反駁 2分	⑨N第二反駁 2分	⑩Y最終弁論 2分	⑪N最終弁論 2分	⑫Y最終弁論 2分

ステップ6 ディベート実施

- ①机をディベート用にレイアウトし、担当班は前に着席し、準備する。
- ②残りの4班の生徒は審査員となる。審査用紙を配布し、記入方法を解説する。
- ③YES派立論から開始。

この時の教員の役割は以下のとおり。思った以上に忙しい。

- ・キッチンタイマーで制限時間を計測し、全体の進行役となる。作戦タイムが超過しそうな班に警告する。
- ・発言の概要を記録し、発言者の評価を行う。作戦タイムに誰がチームの主導権を握っているか、有効な助言者は誰かを観察・評価する。
- ・教員は内容の訂正補足はできるだけ避ける。聞いている側が理解できずに困っている場合などに話を整理することもあるが、極力避ける。
- ・ビデオ撮影（DVDにして希望者に贈呈している）。

- ④最終弁論で終了。審査用紙の判定記入を促し、その場で回収、集計して勝ちチームを発表する。個人名をあげて勝因を解説・講評する。

ディベート実施風景



次の資料は平成22年度3年生による「ホームレス自立支援」をテーマにしたディベートの審査用紙である。この審査用紙は回収し、評価後、本人に返却するが、考査でディベートに関する出題があると伝えるため、大半の生徒が発表者の発言内容を概ねこの詳しさと書いてくる。

この用紙はただ書き取るだけなら問題なかったが、反論と再反論の応酬が複雑になった場合、矢印でつなぐ作業をきちんとやろうとすると、長い矢印が絡み合っ、わかりづらいという問題

平成22年度ホームレス自立支援についての審査用紙

ディベート審査用紙 3年B組 〇〇番 氏名

テーマ ホームレス支援をもっとすべき

YES派	NO派
<ul style="list-style-type: none"> 会社のリストラ、病気、等々働けなくなる人もいる。その人達のためにも支援すべき。 国の官理で住み込みで工場をつくり働く。 ホームレスを嫌っている人が多いため、難辞を言う人はいる? 国に金がないのはわかるが、働かなくてかまわない。 売れる = 自立? みんな売れるのか? ホームレスを助けることにはならない。 ホームレス用にカプセルホテルを、ホームレスの死者が多い! 最低限の衣食住を与えても良いのでは? 足りないからもっと助けるべき! カプセルホテルはこういい! 衛生環境の悪化! ホームレス達の不安も大きい。 大きな社会問題だ! 	<ul style="list-style-type: none"> 税金はホームレスの為ではない。税金は高い。もう十分支援している。ビッグイシューもある! 税金のムダ インターネットでも売れていると評判! 1000~1200冊売れている 生活保護金がある ホームレスの為に工場を作るのでなく、工場を作り、そこでホームレスをやせばいい。 ビッグイシューを売って就活! カプセルホテルにこだわらなくて良い! これ以上住居を支援しなくて良い! 健康診断などをやっている 自立の見直しが必要(ビッグイシュー) 3億円の中でやれ。 衣食住はもうすでに確保できている。 もっとはすべきでない!

どちらが説得力がありましたか? YES派 NO派

このテーマのMVPディベーターは誰? 〇〇

良かったところ、改善点など

YES: 餅りやすい説明だった!! 反論もしっかりしていた。何故YESなのか明確だった

NO: すごく説得力がある! 情報を細かく理解していると感じた。

があった。論点の対立がわかるような審査用紙に改良したが、本校の生徒はどこに書いて良いかわからず混乱したり、短い文で簡潔に要点をまとめることを苦手とするので、「スペースが狭い」と不評であった。発表順序を①~⑩と採番し、どこに書くかをわかりやすくして、大量に書き取る生徒にも余裕のあるスペースを確保した審査用紙にした。平成23年度にはこれを用いてディベートを実施した。下は平成23年度に実施した「原発廃止」についての審査用紙である。この審査用紙にしてから、以前よりも審査員が「議論がかみ合っている、いない」という感想をもつようになり、ただ聞いたままを書きとるだけでなく、論理的な思考をしながら聞いている様子が見られるようになった。

平成23年度原発廃止についての審査用紙

ディベート審査用紙

テーマ「原子力発電を廃止すべき」

3年E組B番 氏名

①YES立論	②NOから質問	③YESから応答	④NOから質問	⑤YESから第一反駁	⑥NOから第一反駁	⑦YESから第二反駁	⑧NOから第二反駁	⑨YES最終弁論	⑩NO最終弁論
<p>今更にはもう再稼働はしない。</p> <p>故に線量の上昇(増)。</p> <p>地球環境に悪影響、危険性高い。</p> <p>火水発電も使えばいい!</p>	<p>原子力と同じ工場の建設は必要ですか? (火水)</p>	<p>火水発電は、今も同じ様に建設されていく。火水発電は必要だ。</p>							
<p>火水発電は、今も同じ様に建設されていく。火水発電は必要だ。</p>	<p>火水発電は、今も同じ様に建設されていく。火水発電は必要だ。</p>	<p>火水発電は、今も同じ様に建設されていく。火水発電は必要だ。</p>	<p>火水発電は、今も同じ様に建設されていく。火水発電は必要だ。</p>	<p>火水発電は、今も同じ様に建設されていく。火水発電は必要だ。</p>	<p>火水発電は、今も同じ様に建設されていく。火水発電は必要だ。</p>	<p>火水発電は、今も同じ様に建設されていく。火水発電は必要だ。</p>	<p>火水発電は、今も同じ様に建設されていく。火水発電は必要だ。</p>	<p>火水発電は、今も同じ様に建設されていく。火水発電は必要だ。</p>	<p>火水発電は、今も同じ様に建設されていく。火水発電は必要だ。</p>

良かったところ、改善点

YES: 〇〇

NO: 〇〇

本日のMVPディベーターは誰ですか? (YES派) (NO派)

(3) 評価方法

第3段階のレポートで、まずここまでのそのテーマへの「知識・理解」「思考・判断」「技能・表現」「関心・意欲・態度」が評価できる。朱を入れる際に、「知識・理解」に優れた部分には、「具体的にこの用語を活用して攻めているところが良い」というコメントを入れ、「思考・判断」に優れた部分には「NO派への反論を明示してYESの結論まで持って来るところが良い」というコメントを入れ、「技能・表現」に優れた部分には「ディベート当日もこの表現で押すと説得力があって良い」というコメントを入れ、「関心・意欲・態度」に優れたレポートには「がんばって考えてきました」というコメントを入れるといった対応をしている。

しかし、むしろレポートの評価規準は、一読して「説得力があるか」に尽きる。4つの観点がどれも複合して説得力のあるレポートになるため、分けて評価するのは難しい。さらに、1つの論点を深く考えて説得力ある記述で仕上げてきたレポートと複数の論点を短く多数網羅してきたレポートのどちらであっても評価する方針をとっている。多数の論点をそれぞれ緻密に仕上げているのが最良ではあるが、生徒の書けない現状から鑑みてそうはいかないからである。

第5段階の班別作戦会議では、班を巡回しながら助言する中で、作戦用紙への記入を主に担当する生徒と、作戦用紙の記入に際し、話し合いの中心となる意見を出す生徒をチェックしておく。

第6段階では、発表記録を取りながら、以下のような観点から評価している。班での作戦タイムでの活動と、登壇して発表している内容が評価対象となる。実力差が大きいので、班で同一評価はせずに生徒一人一人を個別評価している。

当日までの準備に関する評価

- ・テーマに対する味方側の主張がよく吟味され、整理されている。
- ・敵側の主張や反駁を想定できている。
- ・敵側の主張に対する反駁、敵側からの反駁への再反駁の準備がなされている。

当日の取り組みに関する評価

- ・敵側の主張や反駁の内容をよく聴いており、理解できている。
- ・有効な反駁や資料を作戦タイム中に班員に提案できる。
- ・説得力のある話し方や適切な切り返しで、納得させることができる。

人数の関係や性格的な理由で前で発表しないまま終わる生徒も各班に1～3人いる。そのような生徒は、前に出ない代わりに作戦タイムに班全体の参謀役になっている場合も稀にあるので、話し合いの様子を見逃さない。実施後に個人的に声をかけて、作戦タイムでの活躍を評価し、次回は前に出て発言してみるよう勧めるようにしている。原則として発表しなかった者は発表者評価の最低得点も加点されない。役割分担決めの際にその点は生徒に伝えておく。

審査用紙は回収し、点検評価する。要点を簡潔にまとめてディベートの流れを理解できていたか、詳しく応酬を追うことができたか、途中で集中力が切れずに聞き続けられたかなどの個々の取り組みがわかるので、ディベートでの取り組みの一部として評価に加算している。

これらを平常点として計算し評価するが、生徒にとっては、ディベート直後に行う集計結果発表で勝者になること、MVPディベーターに選ばれることが一番の励みとなっている。多くの場合、休み時間になっても教卓の周りに集まって「負けて悔しい」「最終弁論で勝負がついたね」といった感想で盛り上がる事が多く、授業者にとってもやって良かったと思う時である。

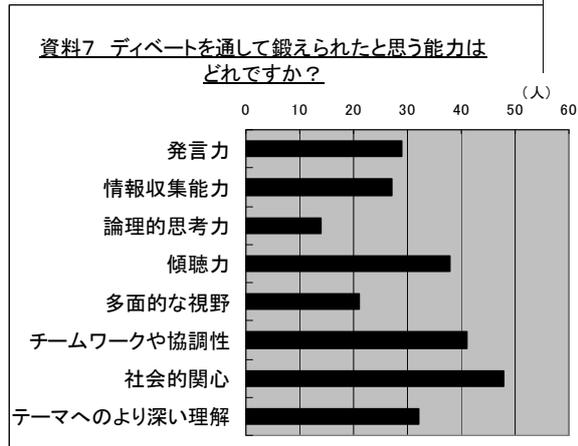
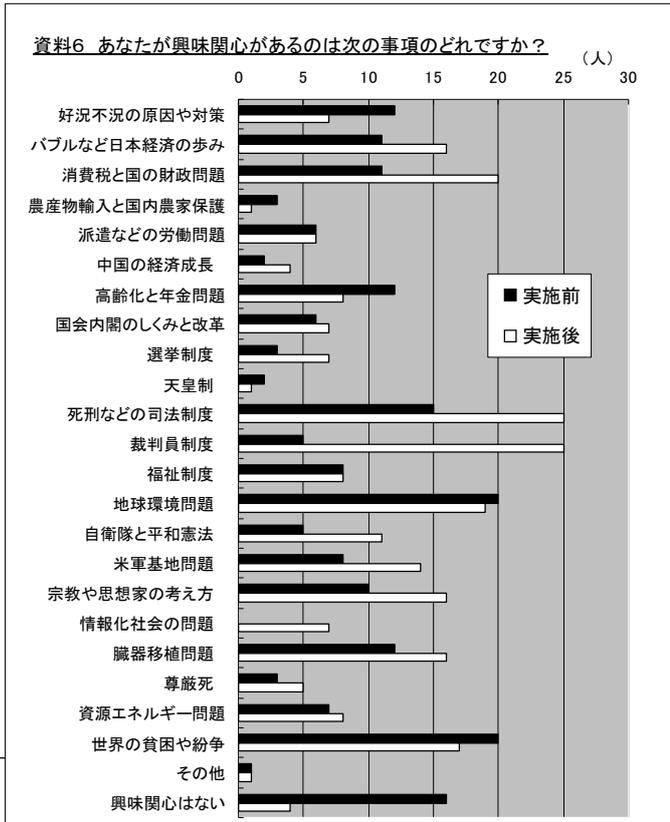
4 ディベート実施結果

(1) ディベート実施前後で生徒の社会的関心がどう変化したか

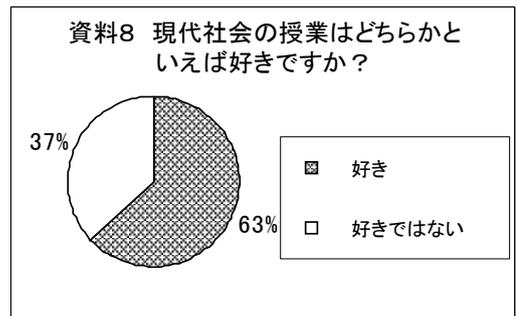
現代社会で扱う代表的なテーマのどれに関心があるかを選ぶアンケートをディベート実施前後の4月と7月でとった。

(77人対象・複数回答可) **資料6**のグラフがその結果である。各項目のうち上段が4月、下段が7月の回答人数。特に1学期にディベートで扱った消費税、選挙制度、死刑制度、裁判員制度、資源エネルギー問題などに関心がある生徒が増加した一方で「興味関心がない」に回答した生徒は減少した。

また、ディベートを通じてどんな能力が鍛えられたかの調査結果は**資料7**のグラフのようになった。社会的関心・チームワークや協調性・傾聴力がついたと回答した生徒が多かった。



さらに、「現代社会の授業はどちらかといえば好きですか？」という質問には**資料8**のグラフのように、資料1・資料2と比較して「好き」・「好きではない」と答えた生徒の割合が逆転した。



(2) 自由記述欄

生徒からの感想には、授業者が期待したディベートを行うことで得られる様々な力の育成や、社会的関心の向上をはじめ、公民として必要な態度の育成につながる重要な気づきがあった。

①課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力の育成に関する感想

▲他の教科も含め、自分で考え、調べ、それについて議論するという授業はなかったかもしれない。だから、現社でのディベートは、自分にとってはとても貴重だった。そういった授業がもっと増えてほしい。▲テーマについて調べてきても、ディベートをするときに調べてきたことをうまくまとめて発言するのは難しいと思った。皆に話を理解してもらうには、まず、自分が理解しないと人には説明できないんだなあと思った。

②現代社会の基本的な問題について主体的に考察し、公正に判断する力の育成に関する感想

▲最初は自分の気持ちとは逆の立場に立ってディベートをするのは嫌だったし、大変だったけど、調べていくうちにYESであったり、NOであったりする立場にも納得できる点があり、楽しくできました。▲自分の考えと逆の意見をやらなければならなかった時、不安だったが、逆に相手が何を言うてくるか、どういう反論がくるか予想しやすくなったし、ちゃんと考えてみると、どんどん意見が思い浮かんで多少驚きがあった。物事を考える大変さと大切さを知った。▲マスコミやメディアによって自分の意見を持たず、世論に流されてしまうことが

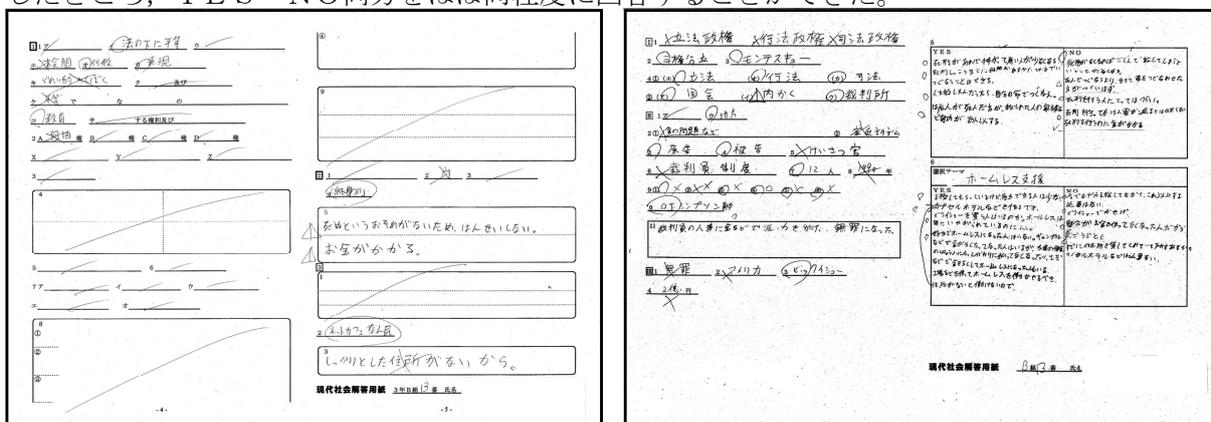
多いと思う。一人一人が情報を集め、周りに流されることなく、自分の意見を持つてほしいと思いました。

③良識ある公民として必要な能力と態度に関する感想

▲まだ高校生だしという甘い考えで今まで自国についてはおろか自分が住んでいる地域についてあまり関心がありませんでした。なにかあっても大人がなんとかするだろうという、もう社会人となる者の考えとしてとても無責任でした。自分のことだけで、周りに目がいかなかったのです…。でも、ディベートをして様々な資料から、また違う意見を聞いたりすることで社会について考えるようになりました。社会に出る前にこのような機会があったてよかったです。▲私は熱しやすい性格なのでとことん調べようと思いました。実際、調べてみると様々な問題が浮かび上がってきて、キリがありませんでした。立論を考え、反論を考え、第2反論を考え…ディベート前日の晩は、もうやりたくないと思たくらいです。資料は準備ができていたと思います。負けたのはチームワークだと思います。協力することの重要さがわかり、とても勉強になりました。ディベートは一人で行うものではなく、チームで行うものだ…。負けたのはかなり悔しかったですが、このディベートを行い、本当に良かったと思いました。▲全然関心がなかったことも、調べてみたら「おもしろい!」「こんなしくみになってたんだ!」と社会への関心が強まった。まだまだ私達の知らない世界が広がっているんだと思ったら、すごい興味が出てきた!

(3) ディベート実施前後で考査答案がどのように変化したか

2つの答案は同一生徒によるディベート実施前後の考査答案である。中間考査では論述欄は空白が目立った。ディベート実施後の期末考査で、同一テーマで質問形式を変えて論述問題を出題したところ、YES・NO両方をほぼ同程度に回答することができた。



5 ディベート実践への検証結果の考察

生徒は最初、ディベートへの戸惑いはあったが、一回実施すればやり方への戸惑いはなくなった。さらに、一回のディベート経験で、「次は説得力のある話し方をしたい」、「勝ちたいから調べてきた」という生徒も増えた。また、審査用紙の改良によって「今のは反論になってないよ」「さっきと矛盾してる」といった指摘が出るようになり、相手の話をよく聞き、論理的な思考をする者も増えた。さらに、クラスの仲間をよく知ることとなり、それぞれの悪癖を許しながら共存することも自覚するようになった。ディベートで扱ったテーマに関する考査での論述問題正解率が高くなった。普段の考査では論述欄は初めから手をつけない空白が目立つが、かなりの生徒が抵抗なく双方の論点を同程度にあげることができ、テーマへの理解が深くなった。さらに「死刑による犯罪抑止力の効果と被告人の人権について」論じたり、「財政難の中、確かにホームレス自立支援は負担が重いが、ホームレスが社会復帰できるようにすることは、社会権として保障され、私達みんなが負うべき責任でもある。」「世の中で起きた事件を他人事ではなく私達が考えることで世の中は変わっていくから、裁判員制度は必要である。」等、予想以上のレベルで書いてくる生徒もいた。教員側の講義だけでは、このような公民としてあるべき真摯な考察はなかったと思われる。また、調べることの楽しさを知った者、よく考えずに情報に流されてきたことに気づく者、社会の一員としての自覚を持つべきだと感じた者、自分の本心とは反対の意見を担当し

てそれまでの自分の考えが浅かったことに気づいた者、チームで協力しなければ勝てないことを知った者、どれもその生徒の生涯にわたる大切な力となり得るものを獲得あるいは体験させることができた。

平成22年度3学期に実施した自衛隊に関するディベートテーマに対しても、平和憲法、日米安保問題、日中関係、中国の経済的な隆盛、日本の財政難、といった4月から現代社会でふれてきた内容を総合的に盛り込んだ議論となり、卒業後に彼らが生きた視点を持って公民としての関わり方をしてくれることを期待させる結果となった。また、講義形式の授業でも生徒の反応が向上し、率先して考え、自分の意見を主張できるようになった。「ここで考えられる問題点は3つある。それは何か?」といった教員の問いかけにも1点ずつ列挙して答えるようになり、対話型の授業が活発に出来るようになった。

1学期に消費税値上げをテーマにディベートを行った生徒が、夏休みに「税の作文コンクール」に出品し、成田税務署長賞を受賞した。「469編の応募作品の中でも消費税の特徴を理解し、自分の考えをしっかりとった文章である点が優れていた」というのが受賞理由である。教員から書くべき内容を指示されないと、いざ書こうとしても書ける内容がほとんどない状態が多い中、ディベートを通じて双方の主張を理解した生徒は、まとまった論文を自力で書けるようになった。これもディベートの大きな成果であった。

6 年間数回のディベート授業を成功させる毎時間の取り組み

1年間に数回、いつもとは違う物珍しさだけでは、ディベートで発言しようという意欲はあっても実力が伴わずに空回りしかねない。普段の授業でも生徒が考えて発言することを奨励・評価する教員側の授業の工夫が重要となる。クジに当たった者が毎回授業の始まりに自分でテーマを決めて調べて来たことを発表するという時間を設けている。VTR 視聴後に単なる感想文ではなく、「2組の葛藤がテーマだが、それは何か?」といった問い方をして考えさせるレポート課題を提示している。さらに考査では論述課題を設け、「原因を3つ」「原因と結果の組み合わせで2組」「プロセスがわかるように4段階で説明せよ」といった条件を提示して論理的な説明力を問うようにしている。さらに優れた作品を上手に紹介してやる気になる生徒を増やすことも重要である。このような普段の授業における「仕込み」如何によって、生徒の論理的思考力、表現力が育成される。結果的にはディベートへの準備も当日の成否も左右される。

7 まとめ

本校に着任して4年が経った。最初は私を不安そうに見ていた生徒達だったが、教員が生活指導・進路指導などで生徒に時間をかけて関わり、教師自らが授業を楽しんで取り組めば、それに呼応して意外なほど真面目に考える生徒が増えるという貴重な経験ができた。生徒と信頼関係ができ、生活指導と教科指導が両輪のように働くのも実感できた。今後も、日々の授業を通じ公正な判断ができ、バランスよく自己主張する力をもつ人材を育成していきたい。それが、本人の生涯にわたる生きる力が育成されるだけでなく、正しい政治参加・正しい社会との関わり方ができる者がより多い社会が醸成され、ひいては、一人一人を幸福にする社会の実現につながるはずである。

最後に、的確な助言と温かい励ましで粘り強くご指導くださった指導課の先生方、教科指導員の先生方に心から感謝いたします。